

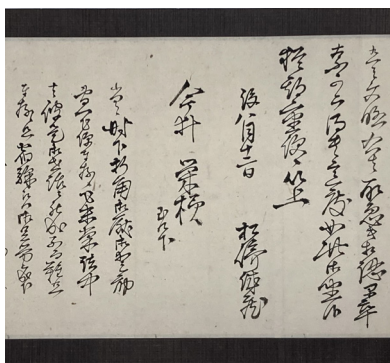
激動の時代を駆け抜けた 久留米の志士の姿を伝える

「松崎家資料」

旧久留米藩士松崎家に伝来し、幕末久留米藩海軍の中堅人物であった松崎誠蔵（1829～1869）関係の古文書を中心とする資料群です。

松崎誠蔵は、藩の近代化に貢献しながら、政争に破れ切腹させられた殉難十志士の一人です。この十志士の関連資料は、所在を追えないものも多く、また、これまでまとまった文書群としてはほとんど確認されませんでした。そのような中で、本資料群は誠蔵の久留米藩における役割や当時の政治情勢などを解明する手掛かりとして重要です。

卷子装「千載史料 第廿二巻



卷子装「千載史料 第廿二巻 松崎誠蔵／今井栄」(部分)

松崎誠蔵／今井栄（写真）は、文久2年（1862）閏8月12日に、京都の松崎誠蔵が、江戸にいる今井栄に宛てた書状です。

この時期の政治状況ですが、同年2月に和宮と将軍徳川家茂の婚礼が行われると、朝廷は幕府に対して政治改革を強く求めるようになり、公武合体を推進した薩摩藩主の父・島津久光が江戸への勅使に随行します。その結果、徳川慶喜が将軍後見職に、松平春嶽が政事総裁職に就任するなど、幕府が朝廷の意向を受け入れました。

誠蔵は勅使一行に従っていたようで、閏8月6日に江戸から京都に到着しました。その後5日間で把握した京都の政治情勢を、江戸の今井栄に伝えました。書中では、京都には諸藩の重役などが多数滞在し、朝廷への周旋活動（手入）が盛んであると報じています。

幕末の政治的・軍事的緊張のなか、在京久留米藩士が、他藩の動向や朝廷内の公家の方針齟齬など、細かに情報を収集し、藩主がいる江戸に報告していたことを示す貴重な史料です。

幕末維新の激動の時代にも 和歌のたしなみ

「和歌短冊三枚」

それぞれの和歌の作者である水野正名（1823～1872）・稲次成令（1851～1932）・稲次正足（？～1895）は、いずれも幕末維新期の久留米藩において政治や経済に尽力した重要人物でした。久留米にゆかりの作品であることから、東京在住の古美術品蒐集家より本市に寄贈されました。

3人の和歌には、政治や社会が目まぐるしく変化した激動の時代にあっても、ふと移り行く季節を感じ、それぞれに思いを馳せた、彼らの細やかな一面を垣間みることができま



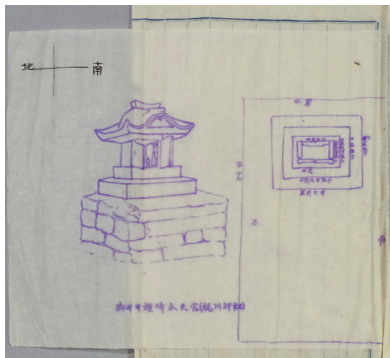
和歌短冊三枚（左から 水野正名・稲次成令・稲次正足の作）

御井町水天宮の近代 受け継がれる地域の信仰

「御井町水天宮関係資料」

御井町水天宮の惣代の家に伝来した資料群で、次のような同宮の由緒と歴史を良く伝えていきます。

同宮は、天保5年（1834）に旗崎に勧請されました。明治時代になると、政府による神祠仏堂整理に伴い、路傍散財取調が行われますが、この時、水天宮堂の据置の出願を遺漏してしまいます。同18年、出願を行い、存続を許可されました。同時に水天宮堂の維持管理のため、祠掌を定め、醸金の運用収益を祭典や修繕に充てることになりました。この間、明治17年に石祠が建立され、現在も旗崎溜池の堤に鎮座します。



御井町水天宮 祠の図面